

北海道のキタキツネ ～街に生きる「都市ギツネ」とは～



池田 貴子 (いけだ たかこ)

北海道大学 科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任講師

1980年、神奈川生まれ、沖縄育ち。博士(獣医学)。修士課程まで帯広畜産大学、博士課程から北海道大学。学生時代より狩猟・有害鳥獣駆除統計解析、都市ギツネの営巣地選択、エキノコックス疫学を専門とし、現職就任以来、主に札幌市内の都市ギツネ問題のリスクコミュニケーションに取り組む。学生とともに、動画、絵本、SNSチャンネル、ボードゲームなどの教材開発に挑戦中。近年は、札幌市ヒグマ基本計画の改訂や北海道エキノコックス症対策協議会媒介動物対策専門部会にも関わる。

昔話や古典文学の中には、キツネが不思議な力でおどかしたり、化かしたりする物語が数多く登場します。現代では科学的に説明のつく自然現象が、「キツネのしわざ」として語られていたケースもあるようです。それだけ、キツネは人の暮らしのすぐそばにいる動物だったのでしょうか。それでいて積極的に人に近づくことはなく、夜や明け方に活動する、という行動様式が、彼らの神秘性をより高めたのかもしれない。

身近だけれどちょっと距離のある存在だったキツネが、近年では街のど真ん中に巣を作って生活するようになりました。こうした彼らの生態の変化により、人間とのあいだに問題が増えてきました。そんな街に住むキツネとの付き合い方について、今回と次号にわたってお話します。

キタキツネはどこからやってきた？

キタキツネはイヌ科に属する中型哺乳類で、主に北半球に広く分布するアカギツネの亜種です。アカギツネのうち、北海道に生息する個体群をキタキツネ、本州以南の個体群をホンドギツネと呼びます。キツネが北海道に定着したのは、人類がこの地に本格的に暮らし始めるよりもはるか昔のことです。氷期には現在の北海道と大陸が地続きになっており、その時代にキツネの祖先が移動してきたと考えられています。寒冷な環境に適応してきたことで、キタキツネは、体つきや

毛の量などがホンドギツネとは少し異なります。

ただ、生態や行動様式はアカギツネにおおよそ共通していますので、今日は、特に個体群による差異に言及するとき以外は「キツネ」と呼ぶことにします。



6月中旬。キタキツネのきょうだい

キツネの1年の暮らし

キツネの出産は年に一度だけ。3月下旬～5月上旬です。12～2月頃に交尾を終えたメスが、春の訪れとともに巣穴の中で仔ギツネを産みます。1度に産まれるのは平均4頭前後。生まれたての仔ギツネは全身が黒っぽく、尾の先だけが白いのが特徴です。体つきもコロコロと丸っこく、鼻先も丸みを帯びているため、仔イヌと間違えられて保護された話を何度か聞いたことがあります。いわゆるキツネらしいオレンジ色の毛に生え変わるのは5～6月頃で、体つきも鼻先もここ

からだんだんシャープになっていきます。この頃には巣穴の外に出てくるようになります。初夏、小さくて細いキツネがじゃれあう姿を見たことがある方もおられるでしょう。あれが、「今年生まれ」のサイズ感です。一度冬を経験すると、毛並みも体格もぐっと立派になります。



5月初旬の仔ギツネ。まだ毛色が黒っぽく、耳も尻尾も小さい



5月中旬の巣穴前の仔ギツネ。毛色はキツネ色、四肢も黒靴下。耳も尻尾もキツネらしくなってきて、もう子犬には間違われない

仔育てのあいだ、キツネは必ず巣穴を中心に家族単位で生活します。キツネの巣穴は、直径20cmほどのトンネルが迷路のように広がった構造で、巣口が複数箇所にあります。大きなアリの巣が、イメージが近いかもしれません。母ギツネが妊娠～出産～^{いぐじ}育児にいそしむあいだ、父親はせっせと餌を獲って巣に運んだり、外敵に目を光らせたり、仔ギツネに狩りを教えたりと、とても熱心に家族を守ります。哺乳類の中でも、オスが積極的に育児に参加する珍しい例です。巣は、メスが代々受け継いでいき、立地条件が良ければ増改築を繰り返して大きくなっていきます。



代々受け継がれているキツネの巣穴。巣口が複数ある。斜面に横穴を開け、トンネルを掘ることが多い

秋、仔ギツネは巣立ちを迎えます。親が仔を追い出す仔別れの儀式により、仔ギツネはしぶしぶ実家を出ていくことになります。キツネは比較的シビアななわばり制を持つ動物で、例え親子であろうと成獣同士になれば競争相手になるわけです。ただし、メスの仔であれば巣に残る場合もあります。次の春に産まれる仔、つまり彼女にとってはきょうだいの世話を手伝えることから、この実家住まいのお姉さんは「ヘルパー」と呼ばれます。

巣立ったキツネは、新しい生息地を求めて遠くへ移動します。これを「分散」といいます。分散距離を明確に示すのは難しいですが、数十キロメートル移動した例もあるようです。子どもが自立した後、夫婦はゆっくりうちでお茶でも飲んで…というわけにはいきません。仔の分散とともに夫婦関係を解消し、それぞれ単独で秋～冬を過ごします。そしてすぐやってくる次の交尾期には心機一転、別の個体とパートナーになります。毎年パートナーが変わるのは他の動物でもごく一般的なことです。そのほうが遺伝的な多様性が保たれるためでしょう。

キツネにとって巣穴は育児に必須の基地なわけですが、仔別れから次の交尾期までのあいだは、せっかくの巣穴を使わずに過ごします。寒い時期なんだから、せめて巣穴の持ち主だけでも穴の中で暮らせば良いのに…と、雪の上で丸くなって寝ているキツネを見ていつも思うのですが、大きなお世話のようです。あの立派な毛皮は、私たち人間の想像以上に暖かいようですね。



キツネの1年のくらし。家族で複数の巣をもち、引っ越しを繰り返すのが普通

『都市ギツネ』はちょっと様子が違う？

これが、一般的なキツネの1年のサイクルですが、「都市ギツネ」では少々、様子が異なるような気がします。いま観察中の札幌市内のある家族では、この分散が徹底されていない、もしくはなわばり意識があいまいになっているかもしれないのです。

ここでまず、都市ギツネについて説明しておきましょう。都市ギツネとは、都市環境に適応したキツネを指します。ロンドンで1970年代に確認されたのが最初で、そのとき「urban fox」という呼び名ができました。それがだんだん他の地域でも街に適応するキツネが観察されるようになり、札幌では1990年代から顕著になったといえます。今ではさらにキツネが都市に適応していて、時間帯によっては住宅地や幹線道路で見かけることも珍しくありません。本州以南や札幌以外の道内都市では、まだそこまで定着していないようです。

意外に思われるかもしれませんが、キツネは最近街に進出してきたわけではなく、30年以上前から街に住んでいたのが、近年の個体数増加と「人馴れ」によって目立つようになった、ということです。それでも、キツネの目撃調査してみると、道東と比べて札幌では目撃頻度が低く、年に数回しか見ないという人が多数派でした。これほど人の近くに生息しながら目撃頻度に差異があるのは、キツネが好む活動時間帯が、夜や明け方だからかもしれません。

さて、巣立ちの話に戻しましょう。通常は新しい生息地を求めて遠征するのですが、ある場所で、育った巣の、ほんの500m先に自分の巣を構えて出産・育児をしている可能性がでてきたのです。順を追ってお話ししましょう。諸説ありますが、一般にキツネのなわばりは2~5kmといわれています。500m先といえば、この範囲内にすっぽり入ってしまう近さです。なわばり意識の強いキツネが、自分のなわばりの中にヨソ者が営巣するのを許すとは思えません。それに、自動撮影カメラを使って観察してみると、この2つの巣の持ち主は互いの巣を頻繁に行き来しているようです。つまり、彼らは血縁関係にあるためになわばり意識が緩いのではないか、ということです。ただし、たったの1例の観察結果ですので、これが一般的な都市ギツネの営巣生態なのかどうかはまだわかりません。今後も調査を続ける必要があります。

いずれにしても、通常よりもかなり狭い範囲に2つの家族が生息しているのは確かです。一般に、資源が豊富であればあるほど、なわばりは小さくなる傾向があります。それだけ、都市環境はキツネにとって非常に豊かな資源を提供してくれるということでしょう。

都市ギツネと人との^{あつれき}軋轢

これだけ高密度にキツネが巣を構えているのであれば、近年の札幌市街地でのキツネの目撃件数の増加も納得がいきます。ここからはいよいよ、都市ギツネと人との関わりについてお話ししましょう。

キツネがどんどん都市に適応している、とお話ししましたが、もともとキツネは山奥だけでなく、山と街のあいだの「里山」の環境を好む動物です。都市ギツネの成り立ちは、今となっては状況から推測することしかできませんが、里山出身の個体が餌の少ない年や秋の分散期に街に遠征し、住んでみたら意外と快適だった、といったようなことだろうと考えられています。動物にとって住環境の条件として絶対に外せないのは、餌が十分にとれること、安心して子どもを育てられること、です。札幌は大きな街ですが、大河川とその周りの広大な河畔林や、パッチ上に存在する農地や都市公園など、キツネにとって住みやすい環境がそ

ろっているのでしょう。

こうしてキツネは札幌市街地にすっかり定着したわけですが、ここ数年で一気に人間との関係が不安定になってきました。キツネと人の距離が近くなりすぎたのです。私が受けたものだけでも2017年からキツネに関する相談が急増しています。被害に遭った方から直接、電話やメールを受けることも稀にありますが、一番多いのは、テレビ局や新聞社から取材依頼を受けてロケに行くパターンです。キツネの被害に関する訴えに十分に対応できる機関も体制も整っていないため、被害者が最終的にマスコミに訴えるケースが少なくないのです。

都市ギツネの捕獲はいろんな意味で難しい

例えば、あなたの家の家庭菜園がキツネに荒らされているとします。エキノコックスの心配もありますし、これはなんとかしてもらわなくては、と市や区に電話します。市や区ではもちろん真摯に状況をきいてくれますし、できる限りの再発防止策を教えてください。現場に確認に行って、必要であれば柵や注意看板を立てることもあります。ですが、明日からキツネを来なくさせる対策は、誰にもとれません。その個体を捕まえて駆除する方法もあり得ますが、これがなかなか現実的でないのです。

まず、ほとんどの野生動物は鳥獣保護法で守られており、簡単には捕獲できません。捕獲には、目的や場所、方法などを細かく決めたくて申請して許可を得る必要があります。一般の人には高いハードルとなっています。また、キツネは警戒心が強く、簡単にはワナにかかってくれません。銃の方が成功率が高いですが、銃を使える場所は都市部では非常に限られています。



札幌市内に掲示されているキツネに関する注意看板

さらに、キツネの場合、実は駆除はそもそもあまり効果的な方法ではありません。やっとのことで駆除したとしても、隣のなわばりから別個体がやってくるので、その都度、捕り続けなくてはなりません。時間もお金も労力もかかる割に、終わりが来ないのです。家庭菜園を辞めればキツネも来なくなるかもしれませんが、それでは本末転倒ですね。この街は人間のものでもあるんですから、庭いじりぐらい好きにさせてほしいです。そんなわけで、都市ギツネを家庭菜園に来なくさせる方法は、実質ありません。季節が変わってキツネが来なくなるか、来年、キツネが河岸を変える可能性に賭けるしかないのが実情です。

ゴミを放置しないのが鉄則

ですが、菜園などをやっていない場合は、もう少し手があります。ゴミの始末を徹底するだけでもかなり誘引物を減らすことができます。ただし、自分の家の庭だけ綺麗にしておくのでは不十分で、近くの公園などにもゴミの不始末がない状態を保つ必要があります。2年前、札幌市内のある住宅街でニワトリ小屋を襲われた方がいました。例によってロケ隊と一緒に現場付近をまわったところ、近くの公園のベンチの下に、お菓子やカップ麺の食べかすが見つかりました。キツネの歯形と思しき跡がついており、近くに新しいキツネのフンも見つかりました。ニワトリが魅力的なのは間違いないですが、この公園も、キツネを確実に誘引していたことでしょう。当たり前のことですが、ゴミの始末は徹底しなくてはなりません。

ただ、どんなにゴミの始末を徹底しても、餌を与える人が一人でもいると、キツネはすぐにやってきてしまいます。今、この「餌付け」が大きな問題となっています。次号では、餌付け問題と、それが助長するキツネの「人馴れ」、そして高まるエキノコックス感染リスクとその予防策についてお話しします。

参考文献

- Ikeda, T. et al. (2014) Where to deliver baits for deworming urban red foxes for *Echinococcus multilocularis* control: new protocol for micro-habitat modeling of fox denning requirements. *Parasites Vectors* 7, 357. <https://doi.org/10.1186/1756-3305-7-357>
- 浦口宏二 (2015) 「市街地に出没するキタキツネの実態とエキノコックス症」『森林野生動物研究会誌』40, 45-49.
- 中園敏之 (1970) 九州におけるホンダギツネの巣穴について 2. 巣穴の構造 4 例, 哺乳動物学雑誌, 5, 2: 45-49.